

当時の副首相(UMNO 副総裁)アンワルはマハティールと対決、その後、政府・与党から追放されたことはよく知られている。ザヒドはその際、国内治安法 (ISA) で逮捕され、失脚した。その後、アブドゥラ前政権下でザヒドはナジブとの良好な関係によって徐々に党・内閣内で復権していたが、漸く失脚前の失地を完全に回復したと言えるだろう。

組閣において注目すべきは副首相ムヒディン・ヤシンが教育大臣を兼任した点である。多民族国家マレーシアでは教育大臣は重要ポストで首相や副首相へのキャリア・パスの中で一度は経験しなければならない重要ポストである。だが、教育大臣就任は副首相に就く1つか2つ前のポストで、副首相が教育大臣を兼務したのは筆者の記憶だと独立前のトゥン・ラザク(後の第2代首相)を除いて他にはない。副首相はこれまで防衛、財務、内務といったポストを兼務してきた。その点から言えば、内務大臣に就任したヒシャムディン・フセイン(UMNO 党副総裁補)は次期リーダーの地歩を確実に進めたと言える。ムヒディンの教育大臣兼務は副首相に就任した後でトップ・リーダーが経験しているはずのポストを急遽割り当てた側面を否定できない。

UMNO と内閣の人事から見えるのは、UMNO を中心とする国民戦線体制はマハティール時代の90年代以降、舞台裏でひっそりと進行してきた長期低落傾向から脱却できていない点である。中でも1998年にアンワル一派を政府・党から追放した影響とその揺り戻しの混乱の中で次代のリーダーの発掘・育成に未だ問題を抱えていると言えよう。マハティールは未だマレーシア政治に間接的・構造的な影響を与えている。

もう1つは、より直接的なマハティールの影響

である。前述のUMNO 党役員選挙では青年部長にアブドゥラ前首相の娘婿のカイリ・ジャマルディンが当選した。これまでなら青年部長は閣内で何らかの大臣ポストを得るのが通常であったが、カイリには閣僚ポストが与えられなかった。一方でマハティールの息子で青年部長選挙で3位に終わったムクリズ・マハティールが国際通産副大臣として入閣した。この処遇について、党と政府の中でアブドゥラ前首相に近いグループが将来不満を持つ可能性がある。また、ムクリズの入閣により前政権下で批判を繰り返したマハティールを取り込んだ形になっているが、ナジブは構造改革を進める上でアブドゥラ前首相が失敗した党・政府の腐敗や大規模プロジェクト見直し等の「マハティールの負の遺産」に直面せざるを得ない。その際、老いたとはいえ、生来の批判者気質を持つマハティールがどのように動くかは予想できない。

ナジブの首相就任直後の4月7日に行われた3補選(下院1議席、州議会2議席)では下院と州議会選挙区で野党が勝利し、与党が勝利したのは州議会の1選挙区のみだった。終わってみれば補選前と議席の改変は無かった訳だが、与党や政府系メディアが祝賀ムードを演出していた中で現状維持は、与党に対する逆風が依然として止んでいないことも感じさせる。ナジブに残された時間は少ない。ナジブが国民戦線体制を立て直し、次代の有望なリーダー層の発掘・育成にも手を付けることができるのか、注目である。

■2009.4.14 伊賀司(神戸大学博士課程)

ナジブ政権発足についての一般的所感

先日発足したナジブ政権の顔ぶれを眺めると、内政に関しては、経済問題にベテランを、国内諸問題には新顔を積極的に配置することによっ

て、新旧ほど良いバランスを感じさせる。外交に関しては、マレーシア建国以来の伝統ともいえる「全方位外交」の展開が予測されるし、インドネシア、タイ、フィリピンなどの近隣諸国には「安定したマレーシア」を印象づけるのに成功している。また、欧米に対しても、アジア、とりわけ中国に対しても、細やかな対応ができそうな気配りが伺える。

ナジブ首相自身は、前任のアブドラ・バダウィ首相、マハティール首相とは異なる系統の、いわゆる伝統型エスタブリッシュメントであり、有数の文化人・経済人等を輩出し、英国内でも高い評価を得ているノッティンガム大学経済学部を卒業している。政権のスタートラインにおいて、彼の通商その他に関する実績が懸念されるとはいえ、ユーロ圏が成立した欧州内においても独自のポジションを維持している英国で学び、その補佐としてアジア通貨危機を乗り切った経験のある閣僚を置いたことは、ASEAN 内におけるマレーシアのポジションを大きく損なうことはないであろうという安心感を、そして、WAWASAN2020 を目指してまい進してきたマレーシアが今最も必要としている、21 世紀の第二建国期「国父」としての確かなイメージを、国民に与えることに成功した。アジア通貨危機以来、その広がり社会問題化した格差社会の出現という国内の不安感、マレーシアが注視する中国を始めとした世界経済の悪化とともに、若年層の顕著な UMNO 離れを促しているようだが、現実に政策運営を担う政権トップ層にしてみれば、求心力を失っている UMNO の建て直しには、彼を置いて他はないというのが現状であろう。マレーシア経済の緩やかな上昇局面に、追い風としての役割が期待されており、バランス型の典型といえようか。

日本にとって、ナジブ政権の誕生は、良好な

両国関係の維持につながるとして極めて好意的に受け止められた。ラザク政権以降の NEP の基盤とマハティール政権で促進されたルックイースト政策を背反することなく存在させるナジブ氏の政治家像には、日本の政財界にとって良きノスタルジアとしてのイメージが浸透しており、これを契機としてか、企業のマレーシア進出も多く取りざたされている。観光面でも両国の一層の緊密化が図られる動きがあるが、問題は、マレーシア企業の日本進出にはそれに見合う動きが特にみられないことである。日本へのマレーシア人留学生数は、アジアでは中国・韓国に次ぐが、それらの優秀な学生の多くは、留学費用を清算するため、日本の企業に入ることが多いのは、20 年前と変わらないらしい。マレーシアでは、最近ドーナツショップの海外第一号店が出たそうである。それが日本でなかったことは、自然といえば自然なのであるが、ちょっと残念に思われるのは私だけであろうか。

■2009.4.15 荒川朋子

(ここに掲載した記事は「マレーシア世界の窓」として JAMS ウェブサイトに掲載されたものです。「マレーシア世界の窓」では、マレーシアとそれを取り巻く世界の成り立ち・かたち・動きを JAMS 会員が解説します。「マレーシア世界の窓」への JAMS 会員の投稿を歓迎します。広報局)